

乳がんの5%「手術不要に」 見極めに役立つ遺伝子発見

9/28(木) 19:04配信

朝日新聞
DIGITAL

手術をしなくても治るタイプの乳がんの見極めに役立つ遺伝子を、国立がん研究センター東病院（千葉県柏市）のチームが発見した。将来的には、乳がん患者の5%程度で手術が不要になる可能性があるという。横浜市で開催中の日本癌学会で29日、発表する。

同院の向井博文・乳腺・腫瘍（しゅよう）内科医長らは2012年に臨床試験を開始。HER2というたんぱく質が多くあり、ホルモン療法が効かない乳がん患者に抗がん剤などの化学療法をした。半数で乳房の摘出手術前にがんが完全に消えていて、このグループでは「HSD17B4」という遺伝子の働きが抑えられていることを明らかにした。

この遺伝子が手術の必要性を判断する目印として適切かどうかを検証する別の臨床試験は、今年9月に始まった。ステージ1～3の乳がん患者200人を対象とし、約30病院で2年かけて実施する。21年の実用化を目指しているという。

国立がん研究センターの推計では、17年に乳がんの診断を受けるのは約9万人。向井さんは10～15%の患者が検査対象となり、5%程度の4500～5千人が手術を受けずにすむと見込む。「乳房の切除をためらう女性は少なくないので、手術が必要かどうかを判断するマーカーを確立する意義は大きい。他のタイプの乳がんや卵巣がんにも応用できないか研究を進めたい」と話している。（南宏美）

朝日新聞社

手術不要で完治する乳がんを見極め…「マーカー」遺伝子を世界初発見

9/26(火) 9:53配信



乳がんのうち、手術が不要で完治するタイプの判定に役立つ遺伝子を、国立がん研究センター東病院（千葉県柏市）の向井博文・乳腺・腫瘍内科医長らのグループが世界で初めて発見し、今月から効果検証に向けた臨床試験を開始した。

効果が確認されれば、乳がんの5%程度は手術が不要になるとみられる。

向井医長らはこれまでに、乳がんに関し化学療法と放射線治療を行った後、乳房の切除手術をしなくてもがんが消えるかを判定する臨床試験を実施。この結果、特徴的なたんぱく質「HER2」の発現があり、ホルモン療法が効かない「ホルモン陰性」の場合、半数以上は手術せずにがんが消えていた。がんが消えたグループでは、遺伝子「HSD17B4」が働いていないことを突き止めた。手術が不要な乳がんを判定するマーカーになると期待される。

今回の臨床試験の対象はHER2発現があり、ホルモン陰性で、離れた臓器に転移がない乳がん患者200人。がん細胞を採取してHSD17B4の働きを調べてから、化学療法と放射線治療を行い、がんが消えているかを手術で判定する。約30病院で実施する。

2013年に乳がんと診断された人は約7万7000人。転移がある場合を除き原則として手術を行う。このマーカーが利用できれば、年3000～5000人程度の手術が不要になるとみられる。向井医長は「別のタイプの乳がんや卵巣がんなどでも、このマーカーで手術が不要になる人が分かる可能性がある。患者の負担減や医療費抑制にもつながる」と話している。